ポーランド語によるユダヤ抵抗詩アンソロジー
『歌は生き残る』*...Pieśń Ujdzie Cało...*(1947)について

西　成彦

第二次世界大戦下のの日本には、日本語以外を母語とする住民が少なからず住みついていた。ドイツ人をはじめとする外国人居留民もだが、「皇民」として日本で学ぶ学生の中には、たとえば朝鮮語を母語とする者、しかもその朝鮮語で詩を書くものすら、決して例外としてではなく、まさに必然として、数は少ないけれども存在したのである。

死ぬ日まで空を仰ぎ
一点の恥辱なきことを
葉あいにそよぐ風にも
わたしは心痛んだ
星をうたう心で
生きとし生けるものをいとおしまねば
そして私に与えられた道を
歩みゆかねば。

今宵も星が風に吹きさらされる。
（尹東柱『全詩集』、伊吹郷・訳）

1917年生まれのユン・ドンジュは、1942年に日本に渡り、立教大学、同志社大学を転々とした後、1943年７月「独立運動」の嫌疑を受けて、逮捕。1944年３月には「懲役二年」の判決を受けて、1945五年２月に謎の獄死を遂げる。韓国や北朝鮮では、英雄視される詩人ではあるが、いったい今、日本人の何人がこの詩人の名前を知っているだろうか？

●

たとえば、このような問いを立てた上で、戦後ポーランドで編まれたホロコースト詩のアンソロジー『歌は生き残る』...Pieśń Ujdzie Cało...（1947）を紹介かたがたふりかえってみたい。

本の編者はボルヴィチ（Michal Maksymilian Borwicz）――あるいはボルホーヴィチ（Boruchowicz）――といいい、1911年生まれ。ワルシャワ大学では、後の批評家ヤン・コット（Jan Kott）の先輩にあたり、1939年９月のドイツ軍侵攻後、ガリツィアのルヴフに避難したところまで二人は似ている。それから1941年の独ソ開戦まで、ルヴフはソ連軍支配下にあったが、彼らはそれぞれコミュニストと折り合いをつけながら生き延びた（このあたりはコットの『私の物語』に詳しい）。その後、ドイツ軍の進撃とともに、ガリツィアの特にユダヤ人の多くは「絶滅計画」の犠牲となるが、ヤン・コットや、同じく若手の同化ユダヤ人詩人ミェチ

スワフ・ヤストルン（Mieczyslaw Jastrun）らは、ワルシャワに戻って、地下での文芸活動に専念する。一方、ボルヴィチはルヴフに残り、ヤノフスカ収容所に送られることになる。しかし、収容所を逃亡した彼はパルティザンとなって反ナチ運動を再開。彼自身詩人でもあったボルヴィチは、ヤノフスカ収容所時代からパルティザン時代にかけて詩を残し、1943年春のゲットー蜂起でユダヤ人社会が壊滅的な打撃を受けたワルシャワで、翌年編まれたポーランド語による抵抗詩のアンソロジー『奈落から』*Z Otchłani*（1944）にも三編が収められている。ワルシャワとガリツィアをつなぐパイプは占領下にあっても寸断されることがなかったことがここからもわかる。ここで取り上げようという『歌は生き残る』は、この『奈落から』をもとに、戦後のクラクフでボルヴィチが大幅な増補を加え、新たに編集したものである。ルヴフが人民解放軍（ＡＬ）によって解放されるのは1944年７月のことであったが、ボルヴィチは、その後、きわめて精力的にホロコーストの記憶の定着に励んだ。戦後ポーランドが人民解放軍主導で成立したことも、ボルヴィチの作業の持続を容易にしたわけである。

ところが1948年、ボルヴィチはフランスに渡り、ソルボンヌ大学でユダヤ人抵抗詩の研究を続けた。1954年にパリで刊行された『ドイツ軍占領下の死刑囚の文字表現』*Les écrits des condamnés a mort sous l'occupation allemande (1939-1945)*は、ボルヴィチの関心の持続を物語っている。ボルヴィチがフランスに渡った時期、ソ連では、それまでユダヤ系の反ナチ抵抗運動を担ったユダヤ系詩人の多くが粛正の対象となり、逮捕・拘束・処刑の対象にされた。直接の要因としては、イスラエル建国をめぐる国際情勢の緊迫が考えられ、ソ連でユダヤ系芸術家に対して「民族主義」の烙印が捺されるのが、ちょうど1948年であった。その後、フルシュチョフ時代に入って、イディッシュ語による出版活動が再開されるまで、ソ連でのユダヤ系の出版は全面的に停止する。それに比べれば、ポーランドでは1950年代に入って以降も、イディッシュ文学の古典的作家ショレム・アレイヘムの選集やイディッシュ語の入門書がワルシャワで出版されるなど、ユダヤ系知識人の出版活動は持続的に進んだのだが、ユダヤ系抵抗詩の研究を続けようとしたボルヴィチを国外に向かわせた直接の動機については、今のところ謎である。

このあと、ボルヴィチは1987年にパリで亡くなったことが、コットの自伝（前掲書）に書かれている。

●

ところで、用語上の問題だが、私は今日の話の中で、次のような語彙で、当時の作家や詩人の分類を行ないたい。

じつは『歌は生き残る』の序文の中で、ボルヴィチは収められた詩を単純に詩人名のアルファベット順に並べ、詩人が「ユダヤ人」であったか「非ユダヤ人」であったかのあいだの線引きを敢えて避けている。それがナチス人種主義の方法をまねぶことにつながるからだと言えば、私もまた同じ注意をここで払わなければならないのかもしれない。しかし、『歌は生き残る』の中には、「補遺」の一部に、イディッシュ語詩人の詩が十八編収められている。「本編」がポーランド語で書かれた詩に限って収められているのを補う意味での「補遺」である。これはきわめて画期的なことで、『奈落から』にイディッシュ語で書かれた詩は、その翻訳すら収められていないし、逆に、戦後、合衆国やアルゼンチンで再三編まれたホロコーストを生き延

びた詩人たちの作品を集めたアンソロジーには、もっぱらイディッシュ語で書かれた詩（あるいはその翻訳）が集中的に集められている。イデュッシュ語で書いた詩人は、自動的にユダヤ的なバックグラウンドを持つと経験的に判断できるが、そこでは仮にユダヤ系であっても、ポーランド語で表現した詩人は姿をあらわすことがない。ましてや、ユダヤ系ですらないポーランド語詩人たちには出る幕がないのである。ボルヴィチですら、イデュッシュ語詩人の遺産を集めるにあたっては「補遺」という「ゲットー」の中に収めるしかなかったのだが、少なくとも、何語で書こうと、ポーランドでホロコーストを生きた詩人たちの声を記録に残そうというボルヴィチの執念は、きわめて実験的であり、彼自身が、人種ばかりでなく、執筆言語の如何、さらにはホロコーストの直接の被害者であったか、その傍観者であったかにかかわらず、同じホロコースト経験者として、ひとまとめにしようと考えていたことが、はっきりとわかる。

まさにそのボルヴィチの編集方針の特異性を見るために、ここでは「同化ユダヤ人」と「非ユダヤ人」、そしてもうひとつ「未同化ユダヤ人」という三つの範疇を設けておこうと思う。「ユダヤ人」としての烙印を受け入れるしかなかったにもかかわらず、ポーランド語で表現した詩人――それをここでは「同化ユダヤ人」と呼ぶ。この中には、コットやヤストルンやボルヴィチが含まれる。逆に、すでに『奈落から』自体が、その境界を問おうとしなかったのだが、ミウォシュのように、あくまで「新約聖書のユダヤ人」（つまりはキリスト教徒）の立場から、ホロコーストを歌った詩人たちについて、ここでは「ポーランド人」ではなく（それを言うなら、ユダヤ教徒であっても「ポーランド人」であることに変りなかった）、「非ユダヤ人」という名前を与える。一方、両大戦間期を通じて、ポーランド社会に生き、またポーランド語で書く作家や詩人とも交流を行ないながら、それでもイディッシュ語（もしくはヘブライ語）でしか書こうとしなかった作家や詩人たち（これまた膨大な量に及ぶのである）については「未同化ユダヤ人」という、少し耳慣れないかもしれないが、用語を試験的にあてることにしたい。ボルヴィチは、まさにこの三つのタイプの詩人たちを一堂に介させる場所として、『歌は生き残る』という場を開いたのである。

●

それでは、集中から詩をいくつか紹介しよう。まずはきわめて著名な後のノーベル賞詩人、チェスワフ・ミウォシュ（1911-　）の「カンポ・ディ・フィオーリ」から。

ローマのカンポ・ディ・フィオーリには
オリーブいっぱいの籠、レモンいっぱいの籠
葡萄酒をぶちまけ
花を散らした敷石
魚売りが
バラ色の海の幸を積み上げる
黒い葡萄の房が
桃の柔毛に落ちかかる

まさにこの広場で
ジョルダーノ・ブルーノは火焙りにされた
死刑執行人が薪に火を点し
野次馬が周囲をとりまいた
そして火がおさまったと思うまもなく
酒場はふたたび人で溢れるのだった
オリーブいっぱいの籠、レモンいっぱいの籠
行商人が頭に載せて運んできた

ぼくはそのカンポ・ディ・フィオーリのことを思い出した
ワルシャワの回転木馬のかたわらで
春の晴れた夕べ
はずむような音楽が流れるそばで
壁のむこうのゲットーに聞こえる砲撃の音が
はずむような旋律にかき消され
雲ひとつない空に
もやがたちのぼっていた

炎上する建物からときおり風が吹き
黒いものがひらひらと舞い
回転木馬の上から
それをつかむものがいる
火事場に吹く風が
女の子のスカートをめくる
陽気な群衆は笑った
美しいワルシャワの日曜日に

このことはだれかが教訓として生かすかもしれない
ワルシャワでもローマでも
市民は商売に、娯楽に、恋愛に余念がなく
悲惨な焚き火を黙殺する
また人事の過ぎ去りやすさ
ふくれあがる忘却は
火が消えるよりも早いと
べつの教訓を導き出すものもいるかもしれない

しかしぼくはそのとき考えた

死に行くものたちの孤独を
ジョルダーノが火刑台に上った
あの日、人間のことばでは
ひとことも
語ることのできなかった彼のこと
生き残る人々に対する
別れのことばのひとつがみつからなかった

みんな葡萄酒の杯を傾けたり
白いヒトデを売ったりしに行ってしまった
オリーブいっぱいの籠、レモンいっぱいの籠
愉快に騒々しい行商人たち
そんな連中から彼は遠くかけはなれ
まるで何百年もが過ぎ去ったかのよう
火だるまになって彼が離陸する瞬間を
連中はしばし待ち構えていたのではあった

この孤独に死んでいくものたち
世界からすっかり忘れられて
彼らのことばはぼくらには理解できない
遠い昔の惑星のことばだ
そして何もかもが伝説と化し
長い年月が過ぎ
次のカンポ・ディ・フィオーリでは
詩人のことばが反逆をあおる

ポーランドの「非ユダヤ人」がワルシャワ・ゲットー蜂起を扱った作品としては、アンジェイエフスキ（Jerzy Andrzejewski）の『聖週間』*Wielki Tydzień*（1943）が映画などを通じても有名だが、この詩においては炎上するゲットーと回転木馬の対比が絶妙である。しかも死にゆくジョルダーノ・ブルーノの「沈黙」とゲットーの住人が放つ「遠い昔の惑星の言語」とを共鳴させる技巧にも注目していいだろう。ポーランド語で書かれていてこそ、この詩は生きる。しかも「非ユダヤ人」によって書かれてこそ。

この詩は、コットやヤストルンやボルヴィチらの詩と並んで『奈落から』にすでに収められていた。また、1981年、ハーヴァード大学の教壇に立ったミウォシュ（Czesław Miłosz）は、戦時下のポーランド詩が示した特徴について、極限状況の中で、ポーランド詩は新しい形式を産み出さなかった。むしろ戦前の形式を再生産しただけだったという見解を示すために、ボルヴィチの仕事に言及している。

●

次に、ポーランドの戦後詩を代表することになるタデウシュ・ルジェーヴィチ（Tadeusz Rpzewicz, 1921-　）の戦中の作品から「生きていたものが死んでいった」Zywi Umieraliを引こう。ルジェーヴィチは「同化ユダヤ人」であった。

壁に閉ざされ生きていたものが死んでいった
黒い蝿が卵を
人肉に産みつけていた

毎日毎日
まるで通りは
腫れあがった頭を敷き詰めたようだった

父のアーロンは
カビかコケのような顎鬚
白い光の頭
震えながら消えそうな光だった
死ぬ前、父は手から物を食った
干からびた唇を動かして
トルコ石のような目を開いて

小さな部屋で
体がぶきみに肥大していった

サルチャはそのころまだリンゴを売っていた
銀色で、果樹園の匂いのするリンゴ
ゲートの入口で
青いゲート
空気のゲート
それがいきなり炸裂するのだった
建物全体を揺るがせて
うわごとと
喀血のあいだ
壁の菌糸類と
陶器のような冷たい目をした
通りの死骸のあいだ
石と

狂った犬の遠吠えのあいだに
サルチャは赤い服を着て立っていた
色は毒に染まり
手の中でリンゴは潰れた
黄色い手の中、その匂いに
幼虫が身をよじった
リンゴは萎び、リンゴは潰れ
母は死んでいった

もう誰もゲットーにリンゴを運ぶものはなかった
もう誰もゲットーでリンゴを買うものはなかった
毎日毎日
人体は転落し
その打ち抜かれた胸は
薔薇のようだった

説明を要しない詩だ。戦争体験、ホロコースト体験をどう受け止めるかは、ポーランドの戦後国民統合の中核をなす課題であった。その中で、ルジェーヴィチは、戦中詩を越える戦後詩の実験にこのあと積極的に見を投じることになる。そのとき、当然のことながら、「同化ユダヤ人」にも戦争直後のポーランド文壇は大きく開かれていた。

●

つづいて、こんどは戦争を生き延びることの出来なかった「同化ユダヤ人」の中から女性詩人ズサンナ・ギンチャンカ（Zuzanna Ginczнka, 1917―44）の詩（無題）と、ヘンルィカ・ワゾヴェルトゥヴナ（Henryka Lazowertowna, 1910―42）の「小さな密輸商人」Mały Szmuglerを紹介しよう。

私の何もかもが死ぬわけではない〔non omnis moriar〕、―私が誇る私の財産
牧場、私のテーブルクロス、要砦、頑丈なタンス
広々としたシーツ、高価なベッド
そしてドレス、明るい色のドレス、これら私が死んでも残るもの
私はここに一人の世継ぎも残さなかった
せいぜいあんたはその手でユダヤ的な品々を探し出すがいい
ホミーナよ、ルヴフ生まれの女、スパイの妻
悪どい密告者よ、ドイツ人の子を授ける女よ
せいぜいあんたや、あんたの仲間に役立てばいい、まったくの赤の他人よりは
私にとって親しみあるみんな――美辞でも、麗句でもない
私は覚えている、巡査の手入れがあったときのこと

みんなは覚えていた、私のことを思い出してくれた
みんな、枕元に腰掛けて
私のお通夜をしてちょうだい、私の財産の
床敷に壁掛、食器に燭台
一晩中飲んでね、そして夜が明けてきたら
宝石や金を捜し出して
椅子やマットレスや布団や寝台の中を
それで仕事に弾みがつけば
馬のたてがみや海藻や
裂けた枕から湧き出す雲、綿毛のちぎれ雲が
手に絡みついて、両腕を翼に変えるでしょう
私の血はその新しい綿毛を貼り付けるのにぴったり
そして翼をもつみんは天使に変身だわ

ギンチャンカはこの詩を残してまもなく、クラクフ市内で、射殺されたと伝えられる。「まるでシュラムの乙女のような彼女」の詩は「その容貌に似てペルシャのカシーダにも相通ずる」と、後にヤン・コットは自伝的回想（前掲）の中で評している。

もうひとりの女性詩人、ワゾヴェルトゥヴナは、ワルシャワ・ゲットーの詩人としていまや伝説的な詩人として知られ、そのいくつかの詩は、歌として、ゲットー内の自然発生的集会などで歌われるなどしたという。ここで紹介するのは、母親思いのユダヤ人少年の歌だ。

壁を抜け、穴を抜け、木戸を抜け
鉄条網を抜け、瓦礫を抜け、生け垣を抜け
空腹で、果敢で、不屈の
ぼくは猫のように忍び足で、通り抜ける
午後も、夜も、明け方も
吹雪の中でも暑さの中でも
幾度となく命拾いしながら
うなだれはしない、小さな首筋

腋には厚手のズダ袋
背中には穴だらけの包み
そして若いしなやかな脚
そして心には永遠の恐怖
しかしすべてに耐えなければならない
すべてを堪え忍ばなければ
みなさんが明日

おなか一杯にパンが食べられるように

壁を抜け、穴を抜け、煉瓦の山を抜け
夜も、明け方も、日中も
空腹で、果敢で、抜け目のない
ぼくは影法師のように進む
運命がいきなり手の平をかえしたように
ぼくにおそいかかるときも
それが人生
その時は、お母さん、ぼくを待たないで

もうお母さんのところには戻れない
遠くて声も届かない
子どもの失われた命が
街路の砂塵を掘り起こす
ただひとつの気がかりが
固く結んだ唇にひきつれをおこしている
お母さん、いったい誰が
明日はパンを運んできてくれるのだろうか？

●

こんどは、ユーゼフ・ヴィトリン（Jozef Wittlin, 1896―1976）の「ポーランドのユダヤ人に」Zydom Polskimだが、ヴィトリンは開戦と同時にフランスから合衆国に逃れ、ニューヨークのポーランド語雑誌などで評論活動を続けていた。1944年に、合衆国で『奈落から』が復刻された際には序文を寄せている。そういった位置にあった。

汝らの太古の血を受け継いだ血、汝らのこわれやすい骨を受け継いだ骨
おお、ゲットーの兄弟ども、汝らを悼むことばがみつからない

苦しみに満ちた汝らの血がポーランドの敷石にこびりつく
苦しみに満ちた汝らの血が私の歌を重苦しく困難にする
音を立てて砕けた汝らの骨はポーランドの草原で白骨化する
腹を空かせた犬すら見向きもせず、悪態をついてまわる
汝らの内臓は空腹におそわれ、それを死の弾丸が引き裂くのだ
奇蹟を待ってもむだだ、死は汝らを紙でくるんでしまう
紙、新しい死の天使の汚らわしい翼
私の苦しみの歌がかすれた音を立てる――眠れぬ夜に

新時代の砂漠にあって天からの賜物、汝はいずこ？
かつて触れるだけで奇蹟をなしたモーセの恵み、汝はいずこ？
生き物の罪を流してくれる恵みの泉、汝はいずこ？
暗黒を退散させる曙光、汝はいずこ？

ノヴォリーピェ通りでは敷石の下からミルクの泉が湧いた
牢獄の壁の煉瓦からまじりけのない罌粟がこぼれおちる
レシュノ通りにはまるでカルメル山の傾斜のように木の根がはびこった
友よ、汝は夢の中、罪のない心を飲み干す
アメリカからの援助を救世主を待つように待っている
ユダヤ人の医師がいくら伝染病のもとを断とうとするが力不足だ
キリスト教徒の友人がこっそりジャガイモを一キロ運んできてくれた
汝の長であったアダム・チェルニャーコフは毒をあおった

市役所では市長のスタジンスキが迎えた
「握手をしよう、兄弟」――そう言うだけで、何を尋ねようともしなかった

汝らの太古の血を受け継いだ血、汝らのこわれやすい骨を受け継いだ骨
おお、兄弟よ、遠い自由の国から悲しい歌を送る
汝らの内臓は空腹におそわれ、それを死の弾丸が引き裂くのだ
奇蹟を待ってもむだだ、死は汝らを紙でくるんでしまう
紙、新しい死の天使の汚らわしい翼
私の苦しみの歌がかすれた音を立てる――眠れぬ夜に

国外にあって、過去のポーランドを偲びながら歌う形式。この形式はポーランド文学では、ロマン主義時代以来、アダム・ミツケーヴィチ（Adam Mickiewicz）以来の「古典」的な形式ですらある。ヴィトリンに限らず、アメリカ大陸に逃れた詩人たちの多くは、ヨーロッパでの戦況に耳を欹てながら、このような詩を書き綴った。この詩そのものは、1942年８月の作で、ワルシャワではゲットー撤去作戦が開始されて間もない時期だ。中に登場するチェルニャーコフは、1939年９月、当時のワルシャワ市長ステファン・スタジンスキからユダヤ人評議会の長に任命された人物で、しかしゲットー潰滅の危機を恐れて、1942年７月23日に服毒自殺した（チェルニャーコフの死については、「未同化ユダヤ人」イツハク・カツェネルソンの長編詩『滅ぼされたユダヤの民の歌』にも詳しい）、そのニュースに触発されて書かれたものであるらしい。かといって、ワルシャワからトレブリンカへの「強制移送計画」について、その正確な内容までは伝わってはいなかったようである。

●

それでは、こんどは『歌は生き延びる』の「補遺」から、ヴィルニュスの「未同化ユダヤ

人」、ヒルシュ・グリック（HIRSh GLIK, 1922―44）の詩を引いておこう。イディッシュ語で書かれたこの詩は、ロシアの軍歌（ドミートリ・ポクラス作曲）に乗せて、ヴィルニュス・ゲットーの戦士が歌ったものが、ワルシャワをはじめ各地へと伝わり、歌い継がれた。いまでもイスラエルや各地のホロコーストを記念する催しでの人気あるレパートリーとなっている。原題は「断じて言うな」ZOG NIT KEYN MOL。

断じて言うな、これが最後の道だとは
青空が鉛の被いに曇らされても
われら待望の日はまたやってくる
足踏み鳴らせば轟く太鼓、われらここにあり

緑の椰子の国から白い雪の国へ
われらは痛みと悲しみを抱いて来る
そしてわれらの血が滴るとそこで
われらはいっそう力をつけ、意気があがる

朝日がわれらの一日を輝かせるだろう
そして過去は敵とともに消えるだろう
でももし太陽が夜明けに間に合わなくても
この歌は末代まで合言葉として歌い継がれる

この歌は血で書かれている、鉛じゃない
自由気侭な小鳥の歌とは違う
崩壊する壁のあいだにある民の歌
銃を手にして歌う歌だ

●

しかし、『歌は生き残る』の「大らかさ」――敢えてこう呼びたい――は、ただ戦後文学の中に「非ユダヤ人」「同化ユダヤ人」「未同化ユダヤ人」、さらには「戦争あるいは占領経験者」「国外亡命者」の経験から生まれた韻文の総体を分けへだてなく「正典」として盛りこもうとしただけではない、もうひとつの重要な「大らかさ」を含んでいた。

それは「イデュッシュ詩の翻訳」と共に「補遺」に並べられているユダヤ系芸人たちの口承詩が、資料として可能な限り、収められているという点である。

ここでは詩人ワゾヴェルトゥヴナの詩がゲットー全体で歌われ、親しまれるに至った例として「小包のバラード」を引いておく。何とも劇的な歌である。

I

小さな部屋の夕べは長い

窓から扉まで不安が横たわった
つらい、六人も養うのはつらい
職場にも仕事がなく
空腹感は垂れ込める黒雲のよう
それはガラス玉みたいに咽喉につかえる
父親は血管の浮いた両手をよじり
しかし、おばあちゃんが名案を思い付く
「ソロモンおじさんはアメリカにいる
三週間かけて不眠不休で行ったのだ
きっと石のアパートに住んでいることだろう
万能のドルを手にしているだろう
アブラーメクに手紙を書いてもらおう
いますぐおじさんの住所を教えるから
送金はむりでも
差し入れの小包を送ってもらおう」

II

おじさんからの小包は子どもたちの夢
ガチョウの脂身に、蜜のように甘い白パン〔ハーワ〕
おばあちゃんは金色の芋パンケーキ〔プラツキ〕を焼いてくれる
部屋から悲愴感が消え、飢餓が消える
待つ子ども、信じつづけるおばあちゃん
どれだけの夜が、そして昼が過ぎたことか
手紙が投函されたのはずいぶん昔だ
なのに郵便屋さんは来てくれない
「死んだおじいちゃんにはクラクフに義弟がいた
七人もの娘がいる男だ
一人はタルヌフの商人のところへ嫁に行った
そのときありったけの持参金を授けた男だ
アブラーメクに手紙を書してもらおう
お父さんに書かせようか
あの娘ならお金を持っているにちがいない
でなくとも差し入れくらいは送ってくるだろう」

III

寝苦しい夜が町にいすわる
月はまるで金貨が空にはりついたよう
クロフマルナ通りは寝息のような溜息をつく
飢えた口は血が出るほど堅く閉じ

むくんだ足が、むくんだ全身が膨れ上がる
それでもパンを夢に見る
白髪頭はうなだれる
歯のない口元からささやきが漏れる
「娘時代に住んでた村に
私を知ってる男がいる
彼ならきっと助けてくれる
彼も苦労はしているだろうが
子どもたち、静かになさい
サブチャにメガネを持ってこさせて
私が自分であらいざらい書いてみるよ」
便箋に涙が一滴

Ⅳ

夏の午後は騒々しく煮えたぎった
郵便配達夫が小包を運んできた
それはちょうどクロフマルナ通りから
黒い荷車がおばあちゃんを運び出すところだった
子どもらよ、いったい誰と喜びを分かち合うの？
夢に見た奇蹟が起こったというのに
バラードは人の死で終わる
詩人が、飢餓が書くバラードはいつもそうだった

「詩」の内的形式を越えて、「詩」がもはや「歌」が流通するしかなくなっていったゲットーの環境が「詩」に加えた形式的な圧力。ボルヴィチは、占領下のポーランド詩を集めるにあたって、こうした周囲の状況と「詩」のあいだの交渉そのものに目を向けようとするのだ。

資料として残されはしなかったものの、戦時下のポーランドで、いきなり民間人が書き残したと言われる、それこそ幼稚な詩についても、ボルヴィチは導入的な「序説」の中で、たとえば次のような形で触れている。

戦争が始まった初期に、私はひとりの高校教師で植物学をやっている男が、いきなり、詩人へと変貌したケースも知っている。町からの知らせが入って、彼は精神に異状を来したのだ。家からはめったに出ず、家にいても彼は、瀕死の犬のように部屋の隅っこで丸まっていた。ところが、彼はあるとき決心した。考えた末に変身したのだ。彼は抽斗から大きなノートを取り出し（そこには生徒の成績が書き込まれていた）、字の書かれたページをひきちぎって、白紙の第一ページに、粟粒のような字で、起こった事柄をメモしはじめた。（…）これは特殊な例ではない。流血の1939年９月の終わりごろ、ザモシチで、一人の男に出会った。彼はナチによる反ユダヤ的な大芝居

の最中に、みずから割って入り、「自分で見て」「自分で経験」しようとしたのだ。
そして彼はひとまずただ「崩壊」dyspozycjeとだけ書いたのだった。

経験ある詩人もアマチュア詩人も、ホロコーストを、戦争を、野蛮を前にして、「詩」という形式に執着を見せたが、その野蛮に見合った言葉を見つけ出す好機にはなかなか恵まれることがなかった。そういった状況の中で、ほとんど奇蹟のようにして、詩が制作され、消費され、ほんの偶然として、書き留められもした。こうした全体をこそ、ボルヴィチは検討の対象に据えようとしたのだ。実際、歌は人間よりもはるかに逞しく生き延びたのである。地下出版は詩を生き延びさせる一手段ではあったが、それだけではなかった。

●

『歌は生き残る』とは直接関係がないが、日本では「君が代」並みに――あるいは、それ以上かもしれない――知られているフォークソングの「ドナドナ」をめぐって、こんなエピソードがある。

「ドナドナ」は、戦争勃発前に、ポーランドのイディッシュ語詩人、アーロン・ツァイトリン（ARON TSAYTLIN）が詩を書き、合衆国の作曲家ショロム・セクンダ（Sholom Secunda）が曲をつけたのがもとらしい。ところが、それは占領下のポーランドに伝わり、ポーランドの焼け跡で歌われているのを、シオドア・ビケル（Theodore Bikel）が発見・収録した後に、1964年にそれがレコード化（エレクトラ・レコード）され、そこから今度はジョーン・バエズが英語で歌った盤が日本にまで伝わったのである。「ドナドナ」がヒットしはじめたこの時点で、はじめて作曲者であったセクンダが名告りをあげ、いまは彼のもとに著作権が存在する。

こういったエピソードが果たして本当にホロコーストの大きさにぴったり見合ったものであるかどうか、私たちには判断がつかない。しかし、そういったいわゆる「詩」を越えた、ホロコーストと言語の密かな結びつきの全体を見ることなくしては、ホロコーストの規模を後世に語り継ぐことはできないだろう。

●

「ホロコースト」の記憶は誰のものでもない。特に加害者のものだというのでも、特に被害者のものだというのでもないし、死者のものでも生き残りのものでもない。もちろんドイツ人のものでも非ドイツ人のものでもないし、ユダヤ人のものでも非ユダヤ人のものでもない。

しかし、その記憶を「自分たち」のものたらしめるための努力を惜しまない人々が存在し、また歴史的に存在したこともまた事実である。なかでもホロコーストを国民の集合的記憶たらしめるために最大の努力を払った戦後国家として、イスラエルとポーランドがある。記憶というものは、何者かによって領有＝独占されるべく種類のものではないし、イスラエルにしてもポーランドにしても、彼らはその記憶を世界全体が共有できるような形で組織しようとした。

この発表では、そういった全体にまで踏みこむことはできなかったが、戦後のポーランドで、「ホロコースト」をめぐる文学作品を「国民的な古典」たらしめようとした最初の試みとして詩のアンソロジー『歌は生き残る』を紹介し、その上で、その特徴のいくつか――あるいは、その多様性の幅――を明らかにしたつもりである。

私の見る限りで、このアンソロジーは「ホロコーストと詩」を論じる際の、最も「大らか」な枠組を五十余年の今もなお私たちに提示してくれていると考えている。

〔参考文献〕

・原作ポーランド語

Michał M. Borwicz (opr.) : ...*Pieśń Ujdzie Cało...*（Centralna Zydowska Komisja Historyczna, 1947）

Aleksander Fiut : *Rozmowy z Czesławem Miłoszem*　（Wydawnictwo Literackie, 1981）

ヤン・コット『私の物語』（関口時正訳、みすず書房）

Aleksander Wat : *Mój Wiek*（Polonia Book Fund, 1981）

・原作イディッシュ語

イツハク・カツェネルソン『滅ぼされたユダヤの民の歌』（飛鳥井雅友、細見和之訳、みすず書房）

EMANUEL RINGELBLUM : *KSOVIM FUN GETO*（FARLAG Y. L. PERETS, 1985）

――Emanuel Ringelblum : *Kronika Getta*（Czytelnik, 1988）

Ｅ・リンゲルブルム『ワルシャワ・ゲットー』（大島かおり・入谷敏男訳、みすず書房）

GEZANGEN FAR AMKhO（Ateneo Literario en el Instituto Científico Judío, 1977）

・原作英語

Czeslaw Milosz : *The Witness of Poetry*（Harvard Univ. Press, 1983）

Elias Schulman : *The Holocaust in Yiddish Literature*（The Education Department of the Workmen's Circle, 1983）

Victoria Secunda : *Bei Mir Bist Du Schön*（Magic Circle Press, 1982）

・原作日本語

細見和之「言葉と記憶――ツェラン、カツェネルソン、尹東柱――」、『思想』岩波書店、第890号（1998）